

博士論文

小川一眞研究

— 撮影・印刷・出版 近代日本と写真 —

平成 28 年度

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

吉野（岡塚）章子

筑波大学

# 目次

## 序 章

第1節 本論文の目的	1
第2節 先行研究の概要と課題	5
第3節 本論文の構成	12

## 第1章 日本における写真術の習得とアメリカでの写真修行

第1節 生い立ちと時代背景	18
第2節 アメリカでの写真修行と帰国後の構想	21

## 第2章 「玉潤館」の開設と文化財調査写真の撮影、コロタイプ印刷による美術作品の 図版制作

第1節 「玉潤館」の開設	29
第2節 近畿宝物調査	36
第3節 小川一眞が撮影した宝物写真の特徴	42
第4節 『国華』『真美大観』 <i>Histoire de l'Art du Japon</i>	46

## 第3章 写真文化振興への貢献 — 写真雑誌の発刊、写真団体の結成と展覧会の開催

第1節 『写真新報』の編集と発行	61
第2節 『光線並写真化学』の翻訳、出版	65
第3節 「日本写真会」の結成と活動	68
第4節 「日本写真会」と岡部長職	71
第5節 「外国写真展覧会」と『標本写真帖』	75
第6節 浅草凌雲閣と「百美人」展	77

## 第4章 新たな事業の展開 — 網目版写真印刷の導入と日清戦争、日露戦争報道

第1節 「シカゴ万国博覧会」と <i>Illustrated Description of the Ho-o-den (Phoenix Hall) at the World's Columbian Exposition</i> の出版	88
第2節 新聞報道と写真	90
第3節 『東京朝日新聞』と網目版印刷	93
第4節 『日清戦争実記』と『日清戦争写真帖』	95
第5節 『日露戦争写真帖』と『日露戦役海軍写真帖』の共通点と相違点	100

第6節	『日露戦争写真帖』と『日露戦役海軍写真帖』の発行者、 印刷所、発行所と撮影者について	107
第7節	「日露戦役彩色大写真展覧会」の開催	109
第5章 宮廷建築の撮影と皇室技芸員の拝命		
第1節	「北京城」の撮影と『清国北京皇城写真帖』『北京皇城建築装飾』 の出版	115
第2節	「東宮御所」の撮影	120
第3節	皇室技芸員の拝命	123
第6章 「光筆画」の制作と東京美術学校臨時写真科の新設		
第1節	皇室技芸員の報恩製作	140
第2節	東京大正博覧会と「光筆画」	143
第3節	小川一眞と東京美術学校臨時写真科	151
第4節	正木直彦と新生「日本写真会」	154
第7章 撮影・印刷業からの撤退と写真感光材料の研究と事業化の失敗		
第1節	『御大喪儀写真帖』の制作と東京写真師組合からの脱退	162
第2節	乾板製造の成功と日吉町事業所の廃業	166
第3節	廃業後の「光筆画」	169
第4節	小川写真化学研究所のその後と小川一眞の死去	171
結章		180
初出一覧		
主要参考文献		
謝辞		

## 【要約】

### 序章

本論の研究対象である、小川一眞（おがわかずまさ 1860 年（万延元）～ 1929 年（昭和 4））は、明治中期から大正期にかけて、写真撮影から印刷、出版、乾板製造など、写真を軸とした一連の事業を展開し、写真師で唯一、皇室技芸員を拝命した人物である。

幕末期、武士の家に生まれた小川は、10 代後半から写真師として活動を始め、20 代初めに単身渡米。最新の写真、印刷、乾板製造を学び、帰国後は身に着けた技術を使って営業写真館を開業するとともに、写真製版業、出版業を興し、印刷・出版業界に改革をもたらした。晩年は、乾板製造業に専念したが、事業が軌道に乗ることなく 70 歳で没した。

初の皇室技芸員拝命者として、写真業界の発展に貢献した小川一眞であったが、没後、その業績が顧みられることは少なく、小川を顕彰する動きはなかった。また、小川の事績はあまりにも多岐にわたるため、これまで断片的、また部分的には紹介されていたが、それを体系づけて論じられることはなかった。

本論文では、小川一眞の誕生から死去までの活動を、近代日本の歩みに沿うような形で 7 章に分けて考察する。特に、これまで研究が進んでいなかった皇室技芸員拝命後の晩年の活動について、当時の新聞報道や写真業界関係者とのかかわりなどの周辺の調査により明らかにする。その上で、社会の動きと小川の活動を重ね合わせ、小川の写真がどのような意図をもって撮影・出版され、それが当時の人々にどのように受容され、浸透していったのかを検証する。

### 第 1 章「日本における写真術の習得とアメリカでの写真修行」

本章では、小川一眞の出自と幼少期の小川がどのような教育を受けて育ち、日本国内で写真術を習得し、群馬県富岡で始めた撮影業について概観した。次にアメリカへの渡航と現地での写真修行がどのようなものであったか、そして帰国後の日本でどのような活動を展開しようと小川が考えていたかを明らかにした。

### 第 2 章「『玉潤館』の開設と文化財調査写真の撮影、コロタイプ印刷による美術作品の図版制作」

本章では、小川一眞がアメリカから帰国後に開設した写真館「玉潤館」の草創期の活動とコロタイプ印刷業を中心に検証を行った。特に、1888 年（明治 21）から翌年にかけて、宮内省、内務省、文部省の 3 省の協力によって実施された文化財調査に同行し、撮影した写真の内容を明らかにするとともに、その特徴を分析。写真をもとに小川によってコロタイプで印刷された図版が掲載された美術出版物『国華』『真美大観』*Histoire de l'Art du Japon* と調査写

真との関連性を実証し、小川によるコロタイプ印刷が国内外の人々に日本美術の素晴らしさを伝える役割を担ったことを考察した。

### 第3章「写真文化振興への貢献 ― 写真雑誌の発刊、写真団体の結成と展覧会の開催」

印刷業に進出した小川一眞は、出版業もてがけるようになる。本章では、1889年（明治22）から1896年（明治29）にかけて、小川一眞が手がけた写真雑誌ならびに書籍について論じた。小川一眞が1号から4号まで編集兼発行人を務めた写真雑誌『写真新報』、自ら翻訳し、編集・発行した写真研究書『光線並写真化学』、海外の写真作品を紹介した『標本写真帖』、これらの出版は、海外の写真事情を知る小川ならではのものであった。そして小川が発起人の一人となり結成された日本で最初の写真団体である「日本写真会」は、会員の作品発表のみならず、海外作品を日本に運び、「外国写真展覧会」を開催するなど、精力的な活動を行った。小川も1891年（明治24）7月、浅草・凌雲閣で「百美人」展を開催している。

本章では、1880年代後半から1890年代初頭にかけての小川の活動が、日本の写真文化の振興にどのように寄与したかを明らかにした。

### 第4章「新たな事業の展開 ― 網目版写真印刷の導入と日清戦争、日露戦争報道」

小川一眞は1893年（明治26）、アメリカで開催されたシカゴ万国博覧会（5月1日～10月30日）にあわせて開かれた、万国写真公会に商議員として渡米した。小川にとっては最初の渡米（1882年～83年）から約10年後、2度目の渡米であった。

小川は、現地で網目版印刷を知り、翌、1894年（明治27）2月からコロタイプ印刷業に加え、網目版印刷業も開始する。そしてそれは同年8月に始まった日清戦争（1895年（明治28）3月終結）の報道に活用された。また1904年（明治37）にはじまった日露戦争では、日清戦争の時とは比べものにならないほど、数多くの印刷物が作成され、小川もその一端を担った。本章では網目版印刷で刷られた写真が、いかに社会の中に広まり、浸透していったかを解明した。

### 第5章「宮廷建築の撮影と帝室技芸員の拝命」

本章では、小川一眞が撮影を命じられた、国家的プロジェクトとも言える写真撮影である「北京城」、「東宮御所」について検証した。1901年（明治34）の7月から8月にかけて撮影された「北京城」、1909年（明治42）に竣工した東宮御所の写真は、質、量ともに明治期の建築写真の最高峰と位置づけられる。そして東宮御所を撮影した翌年の1910年（明治43）10月、小川一眞は帝室技芸員を拝命する。それまで写真師で拝命した者はなく、初の快挙であった。本章では小川の建築写真の特徴を分析するとともに、帝室技芸員に推挙された理由を探った。

## 第6章「『光筆画』の制作と東京美術学校臨時写真科の新設」

本章では、小川一眞が1914年（大正3）に「光筆画」と命名したコロタイプ印刷による古画の原寸大複製作品が完成するまでの経緯と帝室技芸員の報恩製作として献納した作品について論じた。小川はこの頃、1912年（明治45）頃から本格的に東京美術学校への写真科設置運動にも取り組んでおり、1915年（大正4）に東京美術学校臨時写真科の設置が実現した。新学科設置の実現は並大抵なことではなく、東京美術学校校長の正木直彦校長と写真関係者の協力なくしてはあり得なかった。帝室技芸員を拝命し、写真界を代表する立場となった小川が東京美術学校臨時写真科の設置に果たした役割とその活動内容を検証した。

## 第7章「撮影・印刷業からの撤退と写真感光材料の研究と事業化の失敗」

帝室技芸員を拝命した小川一眞は、東京写真師組合の組長も務めていた。小川一眞は、明治天皇大喪儀（1912年（大正元）9月13日、14日）の写真撮影を行い、『故伊藤公爵国葬写真帖』（著作兼発行印刷者小川一眞、印刷兼発売所小川写真製版所、1909年（明治42）11月15日）を出版するが、この時の撮影が原因で、東京写真師組長を解任されてしまう。そして大喪儀から6年後の1918年（大正7）10月末、小川は写真撮影業を廃業する。印刷業からも撤退し、コロタイプ印刷による古画の原寸大複製作品である「光筆画」は大光社に譲渡する。

1929年（昭和4）9月6日に小川一眞は死去する。小川の死去後、小川が顧問を務めていた乾板製造会社である日本写真工業株式会社はオリエンタル写真工業株式会社と合併し、小川が生涯拘り続けた国産の感光材料の研究はオリエンタル写真工業株式会社に引き継がれることになった。本章では、これまで不明であった小川の晩年の活動について、明らかにした。

## 結章

本章では、各章を俯瞰した上で、小川が何を目指して写真を軸とした様々な活動を行い、事業を展開し、それが日本の視覚文化の形成にどのような影響を与えたのかを考察し、今後の研究の展望を示した。

## 初出一覧

本論文の各章は、以下の論文に加筆、訂正を加えたものである。

### 第2章 第1節

「明治期の写真 百花繚乱の時代」「浮世絵から写真へ 視覚の文明開化」展図録、青幻舎、2015年、168-182頁

### 第2章 第2節、第3節、第4節

「写された国宝－日本における文化財写真の系譜－」「写された国宝－日本における文化財写真の系譜－」展図録、東京都写真美術館、2000年、147-161頁

「小川一眞の『近畿宝物調査写真』について」『東京都写真美術館 紀要 No. 2』東京都写真美術館、2000年、38-55頁

### 第3章 第1節

『写真新報』にみる小川一眞の活動』『日本写真芸術学会誌第20巻・第2号』日本写真芸術学会、2011年、21-29頁

### 第3章 第2節

「明治期における写真文化の発展に小川一眞が果たした役割について」『鹿島美術研究』年報30号別冊、鹿島美術財団、2013年11月、433-443頁

### 第3章 第3節、第4節

「明治期の写真団体と華族－小川一眞の事績からの考察－」「黒田清輝宛 小川一眞書簡 影印・翻刻・解題」『美術研究』第412号、国立文化財機構東京文化財研究所、2014年3月、71-95頁

### 第3章 第5節

「写真－オリジナルという認識の共有」『第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会“オリジナル”の行方－文化財アーカイブ構築のために－』国立文化財機構東京文化財研究所、2010年3月、83-99頁

### 第3章 第6節

「明治期の写真 百花繚乱の時代」 「浮世絵から写真へ 視覚の文明開化」展図録、青幻舎、2015年10月、168-182頁

「小川一眞撮影『凌雲閣百美人人工着色写真アルバム』についての考察」 『東京都江戸東京博物館研究報告』第15号、東京都江戸東京博物館、2009年3月、95-104頁

### 第4章 第1節、第2節、第3節

「小川一眞が手がけた網目版印刷について」 『芸術学研究』第16号、筑波大学大学院人間総合科学研究科、2011年11月、91-99頁

### 第4章 第5節、第6節、第7節

「小川一眞印刷・発行による『日露戦役写真帖』『日露戦役海軍写真帖』について」 『東京都江戸東京博物館紀要 第2号』東京都江戸東京博物館、2012年3月、85-100頁

### 第5章 第1節、第2節

「建築の記憶－写真と建築の近現代－」 「建築の記憶－写真と建築の近現代－」展図録、東京都庭園美術館、2008年、284-291頁

### 第6章 第1節、第2節、第3節

「小川一眞の『光筆画』－美術品複製の極み－」 『近代画説』第21号、明治美術学会、2012年12月、68-93頁

## 主要参考文献

<単行書>

小澤清『写真界の先覚—小川一眞の生涯—』日本図書刊行会、1994年

Okakura Kakuzo, *Illustrated Description of the Ho-o-den (Phoenix Hall) at the World's Columbian Exposition*, TOKYO K. OGAWA, PUBLISHER, 1893.

『創業紀念参十年誌』、小川同窓会編/発行、1913年（大正2）

『写真製版工業史』写真製版工業史編纂委員会編集、東京写真製版工業協同組合発行、1967年

『日本写真全集（全12巻）』小学館、1985-1988年

竹居明男「『日出新聞』記者金子静枝と明治の京都—明治二十一年古美術調査報道記事を中心に—」芸艸堂、2013年

『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、1973年

ヘルマン・フォゲル原著、石川巖関、小川一眞訳『光線並写真化学』編集兼発行人小川一眞、1893年

鈴木一義「日本の機械工学教育 チャールズ・ディキンソン・ウェストを中心に」『学問のアルケオロジー』東京大学、1997年

桑原實監修、磯崎康彦、吉田千鶴子著『東京美術学校の歴史』日本文教出版株式会社、1977年

鎌田彌壽治『日本写真教育史』東京写真大学短期大学部出版部、1975年

『東京大正博覧会出品目録』ジー、シー、ビヤマン編、英文日本案内社発行、1914年

『菊地東陽伝』菊地東陽先生伝記編纂会、1941年

<雑誌>

『アサヒカメラ』第4巻第4号～第6巻第1号、朝日新聞社、1927年（昭和2）10月～1928年（昭和3）7月

『印刷雑誌』第22巻第8号～第23巻第6号、印刷雑誌社、1939年（昭和14）8月～1940年（昭和15）6月

<論文>

関紀子「東京国立博物館が所蔵する小川一真撮影の『北京城写真』が博物館に収蔵されるまでの経緯について」「紫禁城写真展」図録、朝日新聞社、2008年

関紀子「小川一真の北京城撮影と帝室技芸員任命について」『Museum 東京国立博物館研究誌』第626号、東京国立博物館、2010年

塚田良道「上州富岡町における小川一真の写真資料について」『学術フロンティアシンポジウム 画像資料の考古学』國學院大學画像資料研究会、2000年

鈴木紀三雄「史料紹介 小川一真のアメリカ留学中書簡について」『行田市郷土博物館研究報告第5集』行田市郷土博物館、2001年

村角紀子「審美書院の美術全集にみる『日本美術史』の形成」『近代画説』第8号、明治美術学会、1999年12月、

アルバート・M・クレイグ「ジョン・ヒル・バートンと福沢諭吉ー『西洋事情外編』の原著は誰が書いたかー」『福沢諭吉年鑑』第11号、1984年

<展覧会図録>

「百年前に見た日本ー小川一真と幕末・明治の写真ー」展図録、行田市郷土博物館、2000年

## 謝辞

本論執筆にあたっては、筑波大学芸術系教授の五十殿利治先生にご指導を賜り、同じく芸術系教授の守屋正彦先生には貴重なご助言を頂戴しました。心より御礼申し上げます。

私は 1990 年から東京都写真美術館で学芸員として勤務し、いくつかの展覧会の企画に携わって参りましたが、その中でまとまったかたちで小川一眞の作品を展示したのは、「写された国宝―日本における文化財写真の系譜―」展（2000 年）でした。そして 2003 年に東京都庭園美術館に異動し、写真と関連付けながらひとつのテーマで近代から現代までを概観する「庭園植物記」展（2005 年）、「建築の記憶―写真と建築の近現代―」展（2008 年）を企画した際に、それまで知られることのなかった小川一眞の作品との出会いがあり、日本近代における小川の重要性を強く感じるとともに、小川の事績の調査を志す契機となりました。

2008 年に異動した東京都江戸東京博物館には、小川一眞の「百美人」や様々な周辺資料が収蔵されており、写真作品を中心としたこれまでの調査とは異なる側面からの調査を進め、「浮世絵から写真へ 視覚の文明開化」展（2011 年）の企画へとつながりました。

本研究は、これまでの展覧会等でご協力いただいた諸機関の皆様方のおかげで遂行することができました。加えて黒田清輝宛小川一眞書簡を調査する機会を与えてくださいました東京文化財研究所、小川一眞の資料を数多く収蔵する東京国立博物館、その他多くのご協力いただいた各機関と関係者の皆様方にあらためて御礼申し上げます。